様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 4 月 19 日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19791752
研究課題名（和文）介護保険施設における高齢者のその人らしい終末期ケアのあり方に関する研究
研究課題名（英文）Study of End-of-Life Care Appropriate for Elderly Individuals in Long-Term Care Insurance Facilities

研究代表者
平松　万由子（MAYUKO HIRAMATSU）
三重大学・医学部・助教
研究者番号：50402681

研究成果の概要（和文）：
高齢者が終末期を過ごす場所は、介護保険制度の成立とともに多様になりつつあり、どこで最期を迎えることを選択したとしても終末期ケアの質が問われる状態となっている。
本研究では、その人らしい終末期ケアに多大な影響を及ぼすと考えられる、介護保険にかかわる施設（A 県内の介護老人福祉施設・介護老人保健施設・認知症グループホーム）に勤務する、看護・介護職員の認識に焦点をあて、現状の把握及び課題の抽出を行った。さらに課題への具体的な働きかけとして、希望のあった認知症グループホームにおいて事例を通した終末期ケア経験の振り返りを行い、その効果を検討した。

研究成果の概要（英文）：
Living facilities for end-of-life care of elderly individuals are varying under the Nursing Care Insurance System. The quality of end-of-life care, therefore, is always questioned wherever the elderly choose to spend the rest of their lives.
In this study, we focused on the level of awareness of nursing and care staff working in nursing care facilities (welfare and healthcare facilities for the elderly and group homes for the elderly with dementia in A prefecture) under the insurance system, which may have a significant influence on the appropriate end-of-life care for each elderly individual. We tried to understand the current situation of these facilities and identify the problems. As a practical approach to the problems, the experiences of nursing and care staff providing end-of-life care in the requested group homes for elderly persons with dementia were reviewed for cases of death, and the benefits from such experiences were evaluated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	360,000	2,660,000

研究分野：老年看護学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：高齢者　終末期ケア　認知症グループホーム

１．研究開始当初の背景

（1）（２００７～２００８年度）
高齢者が終末期を過ごす場所は、介護保険制度の成立とともに多様になりつつあり、どこで最期を迎えることを選択したとしても終末期ケアの質が問われる状態となってきた。しかし我が国における高齢者終末期ケアの質の向上に向けての取り組みは、始まったばかりであり、多角的な視点から、より具体的に終末期ケアのあり方について検討していくことが求められていると考えられた。そして高齢者がその人らしい自然な生を全うすることにおいて、日々のケアに直接関わる専門職や療養する場所による影響は大きいと考えられた。そこで本研究では、介護保険に関わる施設（介護老人福祉施設、介護老人保健施設、および認知症グループホーム）における高齢者終末期ケアの現状について段階的に調査を行い、施設における高齢者の終末期ケアのあり方について、専門職の役割および他職種との連携などの具体的なケアの指針の作成を目指したいと考えた。

（2）（２００９年度）
本研究の２００７～２００８年の調査と平行して、介護老人保健施設、認知症グループホームにおいては、各々終末期ケアについてのガイドライン等が報告されてきた（全国老人保健施設協会；介護老人保健施設が対応する看取りへのガイドライン作成に関する研究事業報告書．２００６、全国認知症グループホーム協会：認知症グループホームにおける看取りに関する研究事業調査研究報告書．２００７）。
研究開始当初の目的として、ケアの指針を作成することを掲げていたが、上記の様にガイドラインや報告書が出されたこともあり、一般的な指針を作成することよりも、聴き取り調査の結果明らかとなった、現場での実際の課題への取り組みを優先事項と捉え、２００９年度は認知症グループホームへの介入を試みその効果を検討することとした。

２．研究の目的

（1）（２００７～２００８年度）
介護保険に関わる施設（介護老人福祉施設、介護老人保健施設、および認知症グループホーム）における終末期ケアの現状の把握及び課題の抽出を行うことを目的とした。

（2）（２００９年度）
聴き取り調査を行った結果の一部として、看取りを行ったあとの職員の振り返りの場が少ないことが課題として明らかとなった。そこで、今回は認知症グループホームに焦点を当て、個別の事業所で終末期ケアの振り返りを行い、その効果の評価を行うことを目的とした。

３．研究の方法

（1）（２００７～２００８年度）
２００６年８月の時点で WAMNET に登録されているＡ県内の施設および事業所のうち、終末期ケアの経験があり、同意の得られた介護老人福祉施設（５施設）、介護老人保健施設（７施設）、認知症グループホーム（８事業所）を対象とし、終末期ケアに関する聴き取り調査を行った。調査は一施設につき①看護職１名｛リーダー｝②介護職｛リーダー｝１名、③管理的な立場にある方、④ケアマネージャーのうち、参加可能な方を対象としたグループ面接、あるいは個人面接で、半構成的面接法を用いて６０分から９０分、各施設で行った。聴き取りの内容は、事業所の体制（スタッフ数・職種等）、見取りの方針、インフォームドコンセントの実際、他職種との連携、看取りに関わるスタッフへのこころのケアについてなどである。得られた内容を逐語録に起こし、コード・マトリックスを作成し、終末期ケアに関する概念の整理を行い質的帰納的に分析した。
倫理面への配慮として、研究依頼時に、研究の目的、回答内容は目的以外に使用しないこと、調査は匿名であり、調査で得られた内容においてもプライバシーが保護されること、調査に協力しなくても不利益が生じないことについての説明を文書と口頭で行い署名を得た。

（2）（２００９年度）
調査に同意の得られたＡ県内の認知症グループホーム（４事業所）において、個別に終末期ケアの振り返りの事例検討を行った。時期は、２００９年６月～７月である。時間は６０分から９０分で、対象は参加に同意された全職員とした。研究者はファシリテーターの役割を担った。評価として、事例検討前後に自記式質問紙による意識調査を行った。
倫理面への配慮として、特定の事例を想定しながらの事例検討ではあるが、ケア対象者の個人情報は扱わないことを事前に説明し、ケア提供者の認識や思いに焦点をあてた振り返りであることの共通認識を持って、事例検討を行った。また、同意の得られた事業所では、内容を録音し逐語録を作成、質的帰納的に分析することの了承を得た。２００９年度の介入研究においては、三重大学医学系研究科・医学部研究倫理審査委員会の承認を得た。

４．研究成果

（1）（２００７～２００８年度）

１）介護老人福祉施設における終末期ケアの現状と課題

介護老人福祉施設においては、従来から高齢者の自然な終末期への対応を行ってきた背景があり、施設で高齢者を看取ることそのものは、各々が役割として受け止めていた。

ケアスタッフが課題として感じている内容は、併設でない連携病院に勤務する医療者の介護施設や介護保険制度に対する知識・理解の乏しさや、同施設内の他職種との連携に対するジレンマ等であった。

２）介護老人保健施設における終末期ケアの現状と課題

これまで中間施設の役割を担っていた介護老人保健施設においても終末期ケアが制度として求められてきている現状もあり、今回調査を行った施設では、すでに自然な生活の延長上にある死を大切に捉え、日常生活ケアの工夫や、家族への援助、多職種連携、臨死期のケアなどを行っていることがわかった。

しかし一方で、ほとんどの施設において終末期ケアの経験を次に生かす為の振り返りは行われていない現状が明らかとなった。

図１に、聴き取り調査から分析した、介護老人保健施設における終末期ケアに影響する要因の概念図を示す。

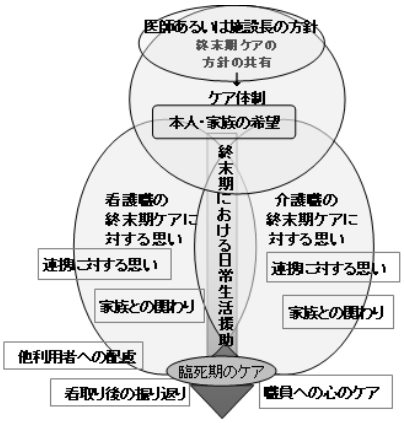

図1 介護老人保健施設での高齢者終末期ケアに影響する要因の全体像

３）認知症グループホームにおける終末期ケアの現状と課題

認知症グループホームにおいては、制度的にも明確に終末期ケアへの取り組みが認められた頃であったが、今回調査を行った認知症グループホーム８事業所では、職員の体制、医師や看護職の関わり方も様々な制約があるなかで、最大限利用者の安全に配慮し、対象者やその家族が安心してその人らしく最後を迎えるための工夫がなされていた。

一方で、管理者とケアスタッフの思いのずれや看取りを終えたスタッフのこころのケアなどの課題も明らかとなった。また、ほとんどの事業所で看取り後の振り返りが少ない現状であった。図１に、聴き取り調査から分析した、認知症グループホームにおける終末期ケアに影響する要因の概念図を示す。

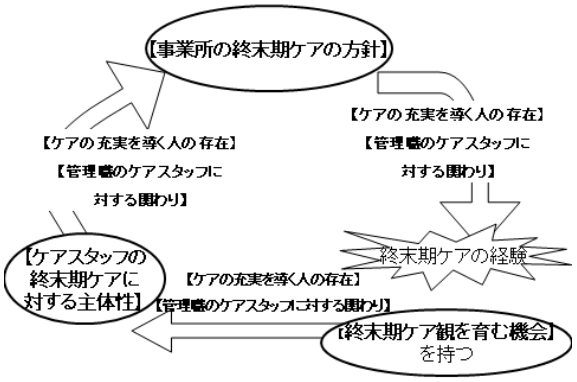

図2 認知症グループホームでの高齢者終末期ケアに影響する要因の全体像

（2）（２００９年度）

１）振り返りの事例検討会参加は、終末期ケアの経験のある認知症グループホーム４事業所の職員（計４８名）であり、介護職、看護職、管理者はもれなく参加していた。概要を表１に示す。

事業所		A	B	C	D
参加人数（人）		15	4	12	17
職種内訳	介護職	13	2	11	15
	看護職	1	1	1	1
	相談職	0	1	0	0
	無記入	1	0	0	1

対象の背景として、これまでに終末期ケアの経験有が９３．８％、無が６．３％であり、そのうち認知症グループホームにおける終末期ケアの経験有が７５％、無が２２．９％であった。

振り返り後の気持ちの変化として、【学べたこと】では、管理者は振り返り考えること、職員が話し合うことの大切さを述べていた。看護職では、介護職のケア観を聞く機会を得たことで新たな気付きを得たと述べていた。また、これまで全く終末期ケアの経験の無い介護職は、「その人との関わりを心にとめてこれから学んできたい」など、意欲的な内容であったが、過去に終末期ケアの経験はあるが、認知症グループホームでの終末期ケアの経験の無い介護職では、「難しく重い仕事と思った」「看取りは大変だと思った」などの

意見もあった。【気付いたこと】としては、介護職の意見として、「自分がかかわることから一歩引いていたように思う」「介護が好きだということに気がついた」など自分を客観視する発言や、ケアに対する本質的な思いが述べられていた。

上記のように、今回は、各事業所１度ではあったが、終末期ケアの振り返りの事例検討を行うことにより、終末期ケア技術の蓄積や共有のみならず、本質的なケア観を育む場になることや、他職種との連携や協働においても促進的であることが示唆された。しかし、認知症グループホームでの終末期ケアの経験がない介護職や、新人介護職の場合、今後の経験時の振り返り、意味づけが非常に重要であると考えられる。そのため今後も継続して介入を行い、効果の検証をしていきたいと考えている。また、今後は介護老人保健施設においても同様に、振り返りの事例検討を行い効果の検証を行っていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計８件）

①平松万由子、大渕律子、北川亜希子：“看護・介護職の認識する老人保健施設における高齢者終末期ケアの現状と課題－A県における聴き取り調査から－”日本老年看護学会学術集会（２００９．９．２６）北海道.

②Mayuko Hiramatsu, Ritsuko Obuchi, Akiko Kitagawa：“Factors impacting quality of end-of-life care at group homes for the elderly with dementia” East Asian Forum of Nursing Scholars（2009.3.14）Tokyo.

③平松万由子、大渕律子、北川亜希子：“高齢者終末期ケアにおける専門職連携の現状と課題－Ａ県の介護老人福祉施設における聴取り調査から－”日本老年看護学会学術集会（２００８．１１．８）石川.

６．研究組織
(1)研究代表者
平松　万由子　（HIRAMATSU　MAYUKO　）
三重大学・医学部・助教
研究者番号：50402681

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
大渕　律子　（OBUCHI　RITSUKO）
三重大学・医学部・教授
研究者番号：８０２８９９７５

北川　亜希子（KITAGAWA　AKIKO）
三重大学・医学部・助教
研究者番号：２０４２２８７６